

《論文》

L.A.Cookのコミュニティ・スクール論

—コミュニティ・スクール論の再検討(続)—

高島 秀樹

目次

はじめに

1. L.A.Cookと“*Community Backgrounds of Education*”
 - (1) L.A.Cook
 - (2) “*Community Backgrounds of Education*”
2. L.A.Cookのコミュニティ・スクール論
 - (1) コミュニティ・スクール論の目的
 - (2) コミュニティの概念
 - (3) 子どもの位置づけ
 - (4) 地域社会と学校
3. L.A.Cookのコミュニティ・スクール論の検討
 - (1) 第二次世界大戦後当時の評価
 - (2) 現段階での評価

おわりに

はじめに

近年の日本における学校・学校教育をめぐる諸動向の中で、学校と地域社会との関係をより密接なものとしようという動きは、一つの有力な動向として広く認められているといえる。文部科学省の施策を見ても、教育行政・学校運営の側面においては学校評議員制度（2000（平成12）年度から）、学校運営協議会（2004（平成16）年度から）、学校評価・情報提供（2007（平成19）年度から）などを次々と法制化して実施しており、他方、教育内容の側面においては「生活科」、「総合的な学習の時間」などで地域社会と密接な関係を持った学習を行なうことを推進

するとともに、地域社会の人的資源・教育資源の活用を推進するために教育サポーター制度（2008（平成20）年度から）を試行している¹⁾。

これらの動向のなかで学校教育内容に地域社会に関連する内容を取り入れようとする点についてより詳しく見てみよう。

現行の『小学校学習指導要領』（1998（平成10）年文部科学省告示・2003（平成15）年一部改訂）には、次のように示されている。

第1章 総則

第1 教育課程編成の一般方針

- 1 各学校においては、法令及びこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調

和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする。(以下略)

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 (11) 開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間や幼稚園、中学校、盲学校、聾(ろう)学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること²⁾。

ここに示されたような考え方を直接取り入れている典型的な学習として「生活科」(小学校1・2年)、「総合的な学習の時間」(小学校・中学校・高等学校に共通して設置)がある。文部科学省の説明によれば、総合的な学習の時間は「(1) 地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間、(2) 国際理解、情報、環境、福祉、健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間」である。文部科学省が実施した「総合的な学習の時間モデル事業」(2003(平成15)～2004(平成16)年度、2005(平成17)～2007(平成19)年度)や国立教育政策研究所が刊行した『総合的な学習の時間 実践事例集(小学校編)』などを見ると、その実践にあたって地域社会の実態を学習対象として取り入れている例や地域社会の協力を得て学習を進めていこうとする例が数多く見受けられる³⁾。

このような学校・学校教育と地域社会の関係を密接なものとしようとする考え方やそれに基づく教育実践が盛行を見た時期・考え方を日本

における近代学校教育の歴史の中に求めるならば、昭和初期に盛行を見た「郷土教育運動」⁴⁾と第二次世界大戦後に盛行を見た「コミュニティ・スクール論」の二つを代表的なものとしてあげることができる。このうち、コミュニティ・スクールは「地域社会(コミュニティ)の様々な教育的資源を活用し同時に、地域社会に自分の有する教育的機能を提供する学校。」⁵⁾とされる。当時のコミュニティ・スクール論の理論的背景となったのは、アメリカの教育学者・教育実践家であったE.G.OlsenとL.A.Cookであった。このうちL.A.Cookに関しては第二次世界大戦後の日本においてはIFELL(教育指導者講習)で取りあげられるなど盛んに学ばれ、受け入れられていたが、近年の日本においてはE.G.Olsen⁶⁾に比べてL.A.Cookは取りあげられることが少ない傾向が見られる。

このような状況をふまえて、本稿ではL.A.Cookのコミュニティ・スクール論について明らかにすることを直接的な研究目的とする。さらにその検討結果に基づいて、コミュニティ・スクール論が再び注目を集めている今日の日本においてL.A.Cookのコミュニティ・スクール論がどのような意義を持つのかを明らかにし、さらにそこから学ぶべき点を考えていきたい。

1. L.A.Cookと“Community Backgrounds of Education”

(1) L.A.Cook

L.A.Cook(1899～)について、日本教育社会学会編『教育社会学辞典』(執筆者名不記載)、日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』(執筆・溝口謙三)では、次のように記されている。

〔教育社会学辞典〕

クック Lloyd Allen Cook (1899～) [アメリカ]

インディアナ州生まれ、フランクリン・カレッジ卒。シカゴ大学で学び1932年オハイオ州立大学で学位獲得、オハイオ、シカゴで教べんを取り、1946年ウェイン大学教育社会学科主任教授。ペイーン (E.G.Payne) などの機能学派の影響を受け、社会学の理論と技術を教育問題に応用、とくに地域社会がパーソナリティ形成に及ぼす影響を重視。既往研究から教育社会学上の問題を整理し、わが国戦後の教育社会学研究に大きな影響を与えた。

<主著> *Community Backgrounds of Education, a textbook in educational sociology*, 1938 (五来要人訳、教育とコミュニティ, 1956, リスナー社); *A Sociological Approach to Education*, 1950.

〔新教育社会学辞典〕

クック Lloyd Allen Cook (1899～)

アメリカの教育社会学者。インディアナ州に生まれ、シカゴ大学等に学ぶ。オハイオ州立大学教授を経てウェイン大学教授。社会学ではシカゴ学派に属するとされ、教育機能を社会的観点から考察する機能学派ともいわれる。社会学の理論と技術を教育に応用する教育社会学の立場を強調する。第二次世界大戦後の我が国で『教育とコミュニティ』がオルセンの著書とともに広く読まれた。彼は、地域社会の類型(町村、小都市、大都市)を挙げ、そこにおける児童形成への社会力(家族、遊戯生活、学校生活、映画・ラジオ、児童労働、宗教等)を分析し、教師・学校・地域の関連を求めて、教師教育を重視した。

<主著> *Community Background of Education*, 1938 (五来要人訳『教育とコミュニティ』1950, リスナー社); *A Sociological Approach to Education* (with E.F. Cook), 1950; *Intergroup Education* (with E.F. Cook), 1954; *School Problems in*

Human Relation, 1957⁷⁾

これらの記述からは、社会学に関する基礎的な理論を教育研究に応用して地域社会と教育の関係について考察し、そのあるべき姿を提起したこと、その考え方が日本においても広く取りあげられたことが理解される。なお、ここには直接記載されていないが、教育社会学に関する理論的研究も進め、主著の欄に記載されている *A Sociological Approach to Education* (with E.F.Cook) 1950をはじめとする教育社会学に関する概論書をも公刊しており、その研究も日本において広く取りあげられてきた。

L.A.Cookがコミュニティ・スクール論を発表した時期の教育社会学の研究状況について、同じ日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』(執筆・麻生誠)では、次のように記されている。

教育社会学史(抜粋)

第三期は1930年代から第二次世界大戦末までであり、「教育問題の社会学」(sociology of educational problems)と性格づけられる。この時期には、世界恐慌を反映した危機の時代を背景に、青少年非行の問題や教育と地域社会の関係をめぐって深刻化する教育問題について、社会学的立場からの優れた研究が行われた。コミュニティ・スクールの運動を学問的立場から支援したブラウンやクックなどが知られている。この時期の教育社会学は、その学問的性格についての体系化や方法論の厳密化への志向は極めて弱かったが、プラグマティックな立場に立って教育の社会的側面を明らかにしつつ、教育の計画や実践に寄与するという学問的生産性の高さを誇っていた。⁸⁾

この記述に示されるようにコミュニティ・ス

クール論はアメリカにおいて社会変動とそれに伴う教育問題の発生をみた時期に、そのような状況に対応する新しい教育・学校教育のあり方を摸索し、提言しようとする実践的志向を強く持って提言されたものであり、教育の計画や実践に寄与しうるものであった。このような傾向を持つ研究であったことが、社会変動の時期であり、教育制度も改革され、教育内容に関してもそれまでとは異なる新たなあり方が求められていた第二次世界大戦後の日本においてコミュニティ・スクール論が広く取りあげられた理由の一つであろう。それまでの教育行政の側面における中央集権的な教育行政のあり方、学校教育内容の側面における全国画一的なあり方が否定され、地方分権的な教育行政のあり方、地域社会に即応した学校教育のあり方が摸索される中で、コミュニティ・スクール論は示唆に富むものとして広く受け入れられたと考えられる。

(2) “Community Backgrounds of Education”

L.A.Cookの“Community Backgrounds of Education A Textbook in Educational Sociology”は、1938年にMcGraw-Hill Book Co., Inc.から出版され、日本においては1950(昭和25)年に五來要人の訳により『教育とコミュニティ』の書名でリスナー社から出版された。原著の出版は、E.G.Olsenの著書であり、コミュニティ・スクール論のもう一つの重要な著書として取りあげられた“School and Community”1945より7年早く、コミュニティ・スクールに関する著作としては先駆的なものと評価することができる。その内容構成は次のとおりである。

Preface

Chapter I Introduction

Part I Understanding the Community

Chapter II The Community Idea

Chapter III The Little Town

Chapter IV The Small City

Chapter V The Great Metropolis

Chapter VI Planning For Community Life

Part II Social Forces Shaping The Child

Chapter VII Growing Up In The Community

Chapter VIII Family Life And The Child

Chapter IX Play Life And Gangs

Chapter X School Life

Chapter XI Children Who Work

Chapter XII Youth On The Road

Chapter XIII Motion Picture

Chapter XIV Radio And Reading

Chapter XV Race Relations

Chapter XVI Religion In Child Life

Part III Teacher, School, And Community

Chapter XVII The Teacher In The Community

Chapter XVIII Who Controls The School

Chapter XIX Progressive Education

Chapter XX Education For Adjustment

Chapter XXI Teacher And Their Training

Index⁹⁾

この著書について、L.A.Cookはその自序において、はじめに1938年当時の教育社会学の学問的発達状況について「教育社会学は、教師の訓練に必要な不可欠だと言つたら、実際にそぐわぬものとなろう。学究的訓育に關するかぎり、これは比較的新しく、未発達である。…(略)…教育社会学は、それ自體—その見地、範圍、方法、價值—が不安定である。それ故一つ一つの教材は、この上もなく多様で、標準もついていない研究分野を決定せんとする試案と解するのが至當である。」との認識を示した上で「本書は、やがては、教育社会学の一面となるもの、學校とコミュニティの關係分野を取扱つたものである。」と記している。この著書は學校と

地域社会の関係について明らかにするという直接的意図を持つが、その基本的な学問的立脚点は教育社会学にあるという、L.A.Cookの考えるこの著書の意図・基本的位置づけを示している。

このような基本的な目的に対応して、より具体的には「第一部は、アメリカのコミュニティ生活のタイプを扱い、第二部は、多くの児童を形作る幾多の影響を、第三部は、コミュニティ内の教師と学校を取扱っている。」という3領域について明らかにすることを研究の目的と示している。この3領域の設定、さらにその内容の「分類の順序と、章名の選擇は、教師を志す者の必要と、社会調査の現状によつて決められた。」と、実践的観点を考慮して選択する意図があったことを明らかにしている。

さらに、「伝統的な教師教育のタイプから、生きて変化していくコミュニティとその社会問題の研究へと、大きく振りかわつていくのが、至るところに見受ける現状である。」と、当時の教師養成教育のあり方に対する批判、新たなあり方の提言をふまえて、「本教材は初歩の学生のために書かれたものであるから、理論よりも即實的であり、検討よりも叙述的である。」と、この著書が教員養成課程にある学生に対して有益なものとなることを意図していることを示している。そのために、より具体的には「實例研究と個人体験の文献は、生活状態への最も手近な接近となるものであるから、ふんだんに利用した。」と、その記述の特徴を示している。また、「本書は、教育社会学教室用として編まれたものであるが、その他の社会学、教育、児童福祉の課程においても役立つものとなろう。同じくまた、父母と先生の會、教育會、その他の成人研究グループにも興味あるものとなろう。」¹⁰⁾と想定する主な読者層を示し、この著書がその各々に対応しうる意図・内容・特質を持つと示

している。

2. L.A.Cookのコミュニティ・スクール論

(1) コミュニティ・スクール論の目的

L.A.Cookはコミュニティ・スクール論について説明する前提として、著述当時の社会状況について、「時というもの、印象的なことは變化という點で一しかもそれは急速な、擴がつていく、目まぐるしい變化である。この變化が、いつでも一ばん注目の的となつてきたというのも、そこからさまざまな社会問題が起きてくるからである。」と、社会變化の時期にあること、その社会變化に伴ってさまざまな社会問題が生じてきているという最も基本的な認識を示している。「このことは、コミュニティ生活の、他のすべての面と同じく、教育でも矢張りそうである。それ故、學校が大擴張される時代は、教育が十字路に立っているものと考えられた時代である。」¹¹⁾と社会變化とそれに伴う社会問題の発生という状況が教育・学校教育の領域においても生じているという認識を示している。

そのうえで、教育の変動状況とそれにもなつて発生している問題について明らかにするためには、「もし教育が袋小路に來たものとするれば、過去を一瞥してみることも、見とし^(ママ)をつけるうえに役立つこと、なろう。」と考え、過去の状況について明らかにすることから考察を出発させている。時代を遡って比較的安定した時代の社会状況、教育に関する状況については「四十年ばかり前に先生をした人の経験について考えてみることにしよう。」として、その具体的な談話を記載した上で、「當時教師は、世間の厄介ごとを双肩に擔うことがなかつた。たゞ少しばかりの基本的なこと、技術を教え、學科を割り當て、復誦を聞いてやり、それだけで家に歸つてしまった。教育の大部分はコミュニティの受持つ仕事となつていた。その狙いは、社

會的遺産の最も大切な要素と、現在行なわれているさまざまなお手本を伝えることだった。その方法は、やつてみて覚えるという、古くからあるやり方だった。』¹²⁾ととらえている。

そのような状況に対して、著述当時の社会状況について「今日われわれは、新奇な世界に生活している。すなわち、工藝の進歩、人口の増加、急速度の交通機関、都會主義、産業主義、人種的異質、極度の個人的な動き、などを含む世界である。」という認識の下に、より具体的に失職、家族、罪惡、勞使、階級や地位、主義、生活様式などについて説明している¹³⁾。そのような社会変化の状況に対応して、「社會生活が複雑になるにつれ、コミュニティの大人は新しい問題に當面した。どのようにして兒童を、この急變しつゝある世界に馴致したものか？ そのような教育を誰にさせるのがいゝか？ 歴史に見る回答は言うまでもなく、特殊の施設、すなわち學校を發達させよう、というのだった。…(略)…學校とは、もはやコミュニティの手に負えなくなつたこと、つまり兒童を教育することを引受けて行うよう、コミュニティが創り出した考案物なのである。』¹⁴⁾と、先に記した學校がきわめて限定的な役割を果たしていた時代から変化して、學校の任務が時代の進展とともに拡大してきたという基本的な認識を示している。その上で、「社會秩序の逼迫が、學校へ流れ込んでくることは、當然豫期されるものである。」が、それに対して「學校の歴史は實に素晴らしい擴張を示しつゞけてきた。」と量的な面では対応することができたものの、「學校が足ぶみしていた」と非難されていること、すなわち社会変化とそれにもなつて生ずる教育・學校教育に対する課題・期待に十分には対応しえていないと指摘している。このように非難されるのは教育の変化の性質に起因するものであり、教育の変化が「外殻の変更」、「大きさ」

と「構造」の変化にとどまっていた、「内部の核心」、「指導」や「機能」が変化しえていないことによるとその理由を指摘している。さらにそれは、「(生活が) 加速度的な歩調で先のほうへ進んでいつてしまう。そこで學校は袋小路へ入つたことになる。」からであり、「遺産を伝えることが教育の目的だということは、もはや辨解の理由にもならなくなつてはいるが、教育が目ざすべき新しい方向については、今のところ一般的な意見の一致は見られない。』¹⁵⁾との認識を示している。

このような当時の教育・學校教育に対する現状認識を示した上で、コミュニティ・スクールの目的について「どんな教育を目ざして進むべきものか、それを決めることは容易ではない。」と断りながらも、「本質的には、ちやんとした計畫の下で生徒が成長していくこと、育つていく人間を、變化していくコミュニティに同化させるよう、思慮ある努力をすることのように思われよう。」、「名称は何であれ、この種の教育は學校と生活の間隙に橋をかけ、個性と人格を發達させ、地方のコミュニティを、更に住み心地のよい所にしようとする努力させることになる。』¹⁶⁾と説明している。さらに、生徒を「これは學ぶ者を、先へ進もうとして探求する生體と見做す。」と位置づけた上で、コミュニティ・スクールの任務について、「その任務は、經驗を擴く且つ深くし、叡智を解放し、基本價値の評價力を増すことである。」とし、「極端な進歩主義ではない」、「社會變化に参加するようには命ずるものである。」と説明している。L.A. Cookはコミュニティ・スクールの基本的な目的について、①生徒をコミュニティに同化させ、その一員にふさわしい人間とすること、②そのために學校と地域社会との関係を密接なものとし、③生徒をより良いコミュニティ形成に寄与

することのできる人材とすること、④その具体的方策として「経験」を重視すること、と考えていたと理解される。

このような目的のもとに、教育問題をコミュニティの側面から研究していくには二つのアプローチがあるとしている。

その1は、社会学的立場からのアプローチであって、地方的な社会圏には何らかの形で大きな社会にある要素や過程が残らず含まれているが、こうした抽象的な概念とは別にコミュニティには具体的な実際性があり、その生活と構造を分析していくというアプローチである。このアプローチを取り上げる場合には、最近の全国的傾向に照らしながら研究する必要もあることを注意している。

その2は、教育学の立場からのアプローチであって、地方的な社会圏が勉学と教授の基本的単元となるというアプローチである。それは、コミュニティが最大の教育者であること、児童がそこで成人となること、学校で習得することに影響を与えることからである。コミュニティは教師にとっては生活材料の主要なる出所となり、自らを調和させなければならぬ世界でもある。コミュニティは学校の効果的な環境であって、それ故その生活の全容が教師の関心の的となると考えられる¹⁷⁾。

このような基本的な考え方に立って、L.A. Cookはこの著書において、①アメリカのコミュニティ生活に対する社会学的展望を示す、②学童をコミュニティの生産物として研究する、③コミュニティと関連させて教師と学校について考察する、の3部構成により研究・著述を行うと、その意図を示している。なお、そこで示される見解は、「直接に接触して得る材料」の啓発的な使い方に重きを置いているという基本的な特質を持つことを合わせて示している¹⁸⁾。

(2) コミュニティの概念

L.A.Cookはコミュニティの概念として基本的には「…(略)…コミュニティは、共通の価値目的で結び合わされていると感ずる、大勢の人々を指している。」とした上で、この研究の目的に即して考えるならば「…(略)…コミュニティは、ある場所を占める特殊の型のグループ、プラスその文化、すなわち、一地域の住民を包含し、特定の方法で機能を現わす活動圏、というほどのものとなる。」「もつと具体的に定義すれば、コミュニティとは、接触する領域に住み、共通の経験によつて統一され、幾つかの基本的奉仕設備を持ち、地方的團結を意識し、団体組織の資格で行動できるような、住民總體のことである。」と定義している。なお、このうち「接触する領域」については、「それ(コミュニティ)は本質的に、自然的な地域であり、共通の文化と、地方的意識を現わしている地域であつて、境をつけて地図に描き出すことはできよう。」と、「共通の経験によつて統一される」については「コミュニティ内の人々が参加したことがあつて、かれらがそれに気づいているような歴史的過去を意味している。」¹⁹⁾と説明している。L.A.Cookは、コミュニティについて基本的には「人びとの集まり」、「社会集団」であり、独自の「文化」を持つ存在、すなわち、「人」と「土地」と「文化」の複合体であり、人口、地域、広義の文化を持つものが「コミュニティ」であるとしていたと理解される。なお、L.A.Cookは「社会団体」というよりもより広い範囲を含むことから「住民總體」という方が良いとしている。L.A.CookはR.M. MacIver以来の古典的なとらえ方と共通するような、①住民の居住地としての一定の地理的範囲、そこにある設備と、②共通の経験を持ち、集団意識を持ち、共通な行動の行なえる住民の總體という二つの要素から把握しようとする概

念規定を行なっていると理解される。

その上で、コミュニティの型、すなわち分類・類型化には多様なものがあるが、「教師になろうとする人々が第一に必要とするものは、コミュニティの大きさが増すにつれて起こってくる変化について理解することである。」として、「小さな町 人口一千から一万まで」、「小都市 二万五千から十万まで」、「大都市 百万以上」の3類型を示している。また、コミュニティの研究については、①社会的基本的地図を作る、②社会調査、③コミュニティあるいは団体とか制度とかいう構成要素中のいずれかの生活史、④地方の地域制度ないし奉仕事業を、生活規準ないし理想標準に照らして測定することの4方法が地方生活研究者にとって最も意義のあるものであると指摘している²⁰⁾。

このような概念規定、基本的な考え方にしたがって、L.A.Cookは実在する3コミュニティを紹介している。それは「小さい町=メインヴィル」、「小都市=ミッドルタウン」、「大都市=シカゴ」である。

小さい町=メインヴィルは、西部の採鉱と農牧の地域にある、人口1,410名の町である。メインヴィルの実態が多方面から明らかにされているが、「教育問題」としては、青年層がコミュニティに対して不満を持ち、ハイ・スクール生徒を対象とした調査では2/3が郷里の町で暮らそうとは考えていないということが示されている。多くの人がコミュニティを児童と青年に役立てる機関とすることに気乗りがしていないことが、教育問題に反映しているととらえている²¹⁾。

小都市=ミッドルタウンは、R.S.Lynd/H.M.Lynd夫妻の社会調査研究の対象地であり、中西部の人口約38,000名の都市である。Lynd夫妻の調査研究結果も参照してミッドルタウンのコミュニティとしての実態が多方面から明らか

にされているが、特に都市の大部分が外国や田園地域から来た移住者の集合体であるとの基本的な認識の下に、コミュニティの特質を示している。「教育問題」としては、都市の学校の多くが依然として知育に重点を置いていること、子どもがいる環境としては問題があつて、これらのことが学校にも新しい課題を与えていることが示されている²²⁾。

大都市=シカゴは、都市化の極致を示しており、他の都市と比較して最も多く社会学的調査の対象となっていることから選ばれている。シカゴについてはその概観を示したうえで、大都市が新しい社会的・経済的実体であること、大都市の構造や生活が変化しつつあること、生態学的過程、都市の性格などについて明らかにされている。「教育問題」としては、都市の子どもに対して善い学校、監督づきの遊技場、無料の診療所など必要な社会施設が十分に用意されていないことを示し、その中で学校がどのような責任を持つべきかという問題提起をしている²³⁾。

このように異なるタイプの地域社会を具体的に紹介することによって、L.A.Cookの考えるコミュニティの概念をより具体的に示すと同時に、コミュニティについて把握する場合にどのような視点に立って、どのような点に注目して把握することが必要かという基本的な考え方を示している。

この後、第1部第6章では社会変化とコミュニティの解体の関係について明らかにした上で、コミュニティの再組織化について「社会計画」、「地域計画」、「コミュニティの再組織」について説明し、その中で「学校の役割」については学校教育が唯一の「民主々義を可能にする思想と感情の連帯性を取り戻す方法」であること、教師の責任は「もつと十分に社会の事に参加するよう、若い人々を教育することであ

る。」と示している。

(3) 子どもの位置づけ

コミュニティ・スクールにおける教育実践の対象となる子どもについて、L.A.Cookは最も基本的に「学童をコミュニティの生産物として研究する」という考え方を採っている。この考え方は、より具体的には、子どもは法律にしたがって学校へ行き、学校は彼らを受け入れなければならないが、「子供らが学校に出るようになるまでには、何年かの生活経験と、すでにはつきりした形もでき、発達もしている態度と習癖を持つている。」のであり、「だから教師が彼等を理解しようとするなら、かれらの教室外の生活と背景とを知らなければならない。」「個々の生徒にはたらきかけて来て、しばしば彼を学校の問題ともするような社会力についても知らなければならない。」と説明している²¹⁾。

その上で、反社会的行動を繰り返した少年の実例を検討し、さらに個性の定義と特徴、生成過程などについて説明している。そこから「学校の責任」については、①学童の「学科の進歩をはかる」こと、②生徒に偏った性癖があり、その原因がわからない時に必要となる「診断サービス」、③生徒を専門家に諮ろうとする場合に必要となる「諮問サービス」、④学童の問題について報告や勧告が求められた場合に必要となる「相談サービス」、の4つの仕事があると示し、進歩的な学校ではこれらのサービスを程度の差はあっても実施し、能率を上げていると評価しているが、同時にコミュニティがこれらの社会的価値が大きいということを知ることが学校の変化を生み出すことに結びついていると指摘している。この後の章では「児童の個性を形作る、代表的な幾つかの社会力を研究しよう。」という意図の下に、「家族生活と児童」、「遊戯生活とギャング」、「学校生活」、「働く子

供たち」、「若い浮浪者」、「映畫」、「ラジオと讀書」、「人種關係」、「児童生活と宗教」の9章にわけて、子どもと子どもの生活に影響を与え、その個性を形作る要因となると考える「社会力」について実例も含めて詳細に検討している²⁵⁾。

このような子どもを社会的に形成された存在と考え、そこに影響する社会的な要因について明らかにする必要があるという考え方は、コミュニティ・スクールの考え方の一つの基礎となる考え方である。それは、同時に教師が学校内における子どもを理解するだけでなく、「現職にある普通の教師が持つていないような大きな理解力を、児童を形作るコミュニティの影響力に對して持たねばならない。」という教師に求められる課題を導き出すことにもなる²⁶⁾。

1938年という時点で、早くもこのように子どもをその社会的な形成過程・要因との関連の下にとらえようとする考え方、子どもを「社会的存在」としてとらえようとする考え方を明確にした点も、L.A.Cookの研究上の功績の一つであると筆者は評価している。

(4) 地域社会と学校

L.A.Cookは第一部・第二部で示した基本的認識に立って、地域社会と学校の関係、コミュニティ・スクールについての考え方を「第三部 教師・学校・コミュニティ」において示している。L.A.Cookは「この結論の部では、コミュニティにおける教師と學童について幾多の問題を究めていくことにしよう。」という意図の下に、「…(略)…教師の校外生活、學校統制と教師の自由、進歩教育、社會的に馴致する教育、教師養成の必要…(略)…」²⁷⁾という5つの論点から明らかにしている。

「第一七章 コミュニティにおける教師」では、「人を教えるということは、職業でもあ

るが、また生活の様式でもあるということ、そして教師はコミュニティに住むものであるということは、よくわかっている。これは意味深長なことであるが、また、教師の教育では、頗る等閑に附せられていることでもある。」と基本的な認識を示したうえで、「教師の體驗」、「選擇過程」について明らかにした上で、「教師の行狀の掟」においてコミュニティの管理や期待は男子教員より女子教員に、都会的な地域社会よりは小さな辺鄙な地域社会において大きいこと、それに対応する教師のタイプとしては「同調型」、「反逆型」、「日和見型」の3タイプが考えられることを示している。こうした「教師の行狀の掟」の基礎には教師が「他郷人」と見られており、それを受け入れるための方策が存在しているという考え方を基礎として、教師は児童によってその地方に接するのであり、児童は地方文化を運ぶもの、地域の生活の形式や基準を存続させるのは児童を経て行なわれることを示している。より具体的には「コミュニティの反動について多少とも理解を以てやり出し、自分を學童の指導者と見るだけでなく、同時に大人の指導者となろうとする勇氣と知性を持つて教師が、それを改善することができるわけである。」²⁸⁾と、コミュニティにおける教師のあるべき姿を示している。

「第一八章 誰が學校を管理するか」では、學校管理と教師の自由という問題について、教師を「雇い人」とする考え方と、教師を教育指導者としての訓練と資格を受けた「専門家」とする考え方の二つを対照的に設定して考察を進めている。そこでは具体的には學校に働きかける社会力についてのシカゴにおける実例からの考察、教師に及ぶ圧力についての學校内（学生、他の教師、校長、視学官、教育理事会、生徒の両親など）と學校外（特殊利害と圧力を持つ団体—実業、愛国団体、長老主義など—）に整理

しての考察、教室における教師の自由についてのそれが制限づきの自由であること、自由を確保するための方策について考察した上で、地方の社会問題を教室で討議すべきか否かについてのMichigan州Ann Arbor教育局の政策を評価すべきものとして取り上げている。そこでは「…（略）…社會變化を避くべからざるものと見なし、時事問題を取り扱う教師の権利を認めている。」「更にコミュニティが、即實的教育と社會生活のための學童の準備とが必要なことを認めているとしている。」という意見を紹介した上で、「…（略）…責任ある教師に、多くの者が望む専門的立場を認めてやることになる。」²⁹⁾と教師の権利について記しているが、これは同時にコミュニティ・スクールの基礎としてこのような考え方が必要であることを指摘していると理解することができる。

「第十九章 進歩教育」において、L.A.Cookのコミュニティ・スクールについての考え方が示されている。L.A.Cookは初めにH.HartshorneとE.Lotzが示した「學校が進歩的といわれるための10カ条」を示すことを前提として、自らの考えを「傳統的な學校」と「進歩的な學校」を次頁の表に示すように7点から比較する形式で示している³⁰⁾。

その上で内容的な説明を加えているが、そこでは子どもについては、生きて成長することを仕事とする、活動してやまない有機体ととらえること（児童の概念）、その聡明な、円満な、社会的に調和の取れた個性を伸ばすことを目的とすべきこと（個性の發達）という考え方が示されている。教育活動においては「體驗プラス解釈」が教授の企画や活動方式において最高のものとされるべきこと（活動プログラム）、具体的に實際行動的な體驗がいかなる學問においても大切であること（實生活の研究）、児童の

伝統的な学校	進歩的な学校
<p>大抵の學童は似ている。 並みの學童の概念。 教育は生活の準備、受動的な吸収と再現。</p> <p>型に嵌まったカリキュラム、形式的學課が上と外から課せられる、教材至上主義。 教材を覚えこむことを強調、事柄と技能の習得、抽象的知識の發達。 學校と外部の目立つて隔離し合っている、學童を誘導する問題、形式的訓育、進級第一、教室秩序の維持。</p> <p>狙いは、現社會秩序へ學童を當て嵌めること、結果は、標準的な學習テストで計られる。</p>	<p>二人と似ている學童はない。 個々の相違の概念。 教育は現在の生活の途、生活状態の能動的學習。</p> <p>生徒の興味に沿う活動プログラム、細目は教師と生徒の協力によつて作り上げる。 参加、團體計畫、問題、解釋、自己表現、創造、責任の強調。 生活とつながりつゞく學校、本質的に興味ある活動、豫想する結果による誘導と成果から受ける満足、實在に當面するガイダンス。</p> <p>更に民主的で一層倫理的な社會秩序を求める教育、成果には無形の個性價値が含まれている、新しいテスト法を必要とする。</p>

体験を広め、仕事を決める手伝、社会に入っていく用意をするものとして「ガイダンス」が重要であること（ガイダンスの必要）という考え方が示されている。

このような考察の上で、総括的な記述として進歩的な教育は社会変化への参加に積極的であるべきこと、より具体的には「學校のカリキュラムの中にある社會研究」が「現在並に將來の市民の必要にずつと密接な關係があること」、「生徒をして現在進行中の社會變化に親しませること」、「これを教えるのには、形式的な知識というだけでなく、物ごとの動き方とその對處法に關する即實的な見方として、行うことができるということ」を示し、それがすでに証明済であること、特に「活動學校」において進んでいることを示している³¹⁾。さらに、J.W. Wrightstoneの伝統的な學校と進歩的な學校についての比較調査研究の結果を引用して、次のように進歩的學校の長所を示している。

1. 新らしい實施は、學究的知識、學問、技

能の如き知的素因のテストでは、同等か優秀の成績を示している。

2. 新らしい實施は、生徒の態度と信條がずつと自由で、寛容で、科學的なものになるように導く。同時に、殆んど同等の個人的社會的適應性をつけさせようとする。
3. 更に新らしい實施は、生徒の主導性、責任、好奇心、批判力の如き行動の素因と行爲とを伸ばす機會を、古い實施より多く與える。³²⁾

進歩的な學校教育、コミュニティ・スクールを実現するための具体的な方策については「進歩原理を唱える經驗深い教育者は、普通の小中學校のカリキュラムの再修正を行なつて、多少の成功を納めた。」という文脈であるが「教科書は廢され、讀方教材が編まれ、生活狀況との接觸が行われ、生徒は思慮ある自己表現を獎勵され、學習の成果は、校外生活に當て嵌めてみながら評價される。」³³⁾と示している。また、「教師とその訓練」の章では「教師の準備」に

において、「児童を完全に理解すること」が長年間の教師訓練の狙いとなっているが、いまだ完全には行われていないこと、特に「生理と衛生－健康の素因と素行問題の關係」、「臨床心理学－生きて變化していく児童に対する實際の誘動と異常習癖」、「近代的な、科學的社會學」の3部門が特になおざりにされていると指摘している³⁴⁾。「教育社会学」に関しては、教育家が教師訓練に役立つ教材を指示することができるとしている³⁵⁾。これらの内容はL.A.Cookが考える進歩的な学校、コミュニティ・スクールを実現していくために教師が持つべき資質を示唆していると理解することができる。

最後に、本書で考察し示した内容についての要約的記述として、学校とコミュニティの相互關係について、学校のコミュニティへの接触とサービスが5つの標準、部門に分けられたと見て良いとして、次のように記述している。

1. 教師のコミュニティへの接触は「日常事」のものである。
2. 教育者は、コミュニティが学校を後援することに関心を払う。
3. 学校が地方奉仕機関としての役割を果たすよう努める。
4. 広範な地方研究を行い、地方活動と社会計画の資料を提供する。
5. 社会過程の標準を知ることであり、この研究法はより効果あるコミュニティ奉仕に必要な透視画法を与えてくれる³⁶⁾。

これらの点は、教師がコミュニティ・スクールの実現の為にすべきことを示唆しているものと理解することもできる。

コミュニティ研究は教師の養成教育に独自の貢献をなすうと考えられるが、その実現のためには標準的な教師養成教育カリキュラムを修正することが必要であり、将来教師となる学生

に対して実地作業の期間を与えること、具体的には、学生を比較的小さなコミュニティの学校に配置し、学校とコミュニティの關係について観察し、参加し、検討する体験を持たせることが必要であると提言している³⁷⁾。

第二十一章は「教師とその訓練」との表題が付されているが、特に「要約」や「結論」にあたる章を持たない本書においては全体の結論に相当する記述がなされており、ここにL.A.Cookのコミュニティ・スクールの考え方、その具体的方策・内容、その実現のために教師が果たすべき役割などが要約的・結論的に示されていると理解することができる。

2. L.A.Cookのコミュニティ・スクール論の検討

(1) 第二次世界大戦後当時の評価

L.A.Cookのコミュニティ・スクールの考え方、その基礎にある教育社会学は本稿「はじめに」に記したように第二次世界大戦後の日本の学校教育のあり方、その改革に大きな影響を与えたと考えられる。その具体的な契機の一つとしては、「教育指導者講習会」(Institute For Educational Leadership, IFELと略称される)において、L.A.Cookの著書、E.F.Cookとの共著“*A Sociological Approach to Education*” 1950. がテキストとして用いられたことがあげられる³⁸⁾。

IFELについて高橋寛人は「新教育学大事典」において、次のように説明している。

… (略) … IFELは主に、教育委員会法によって誕生した教育長・指導主事の養成、および新制大学において教職員の養成・現職教育を担当する教員の再教育を行うものであった。他に校長、大学職員、青少年指導者等

を対象とするコースも開設された。IFELの各コースの期間は様々で、1週間、2週間等の課程もおかれたが、12週間という長期にわたるものが主流であった。

IFELは占領下において、CI&E（民間情報教育局）の指導のもとに、1948（昭和23）年10月から1952年3月までの間に8期にわたって開催された。…（略）… 1～8期までの受講者は約9,400人、米国人講師約100名、日本人講師数百名にのぼった。…（略）…

開講講座は、①教育長、指導主事、校長といった現場の指導職のためのもの、②教育原理、教育心理、教育社会学、教育指導、教育評価、幼・小・中等の各段階の教育課程と教授方法、各科教育法などの教職課程関係、③養護教育、図書館学、特殊教育、通信教育など新しい教育分野に関するもの、④大学の管理、財政、学科課程、学生補導など、きわめて多様であった。

…（略）… IFELでは通常、講義は午前中だけで、午後はワークショップあるいは実地見学にあてられ、他に自由研究やレクリエーションの時間がおかれた。講義といっても講演形式の講義にとどまらず、全体討議、パネル・ディスカッション、実演、スライドや映画の上映などが行われた。ワークショップはIFELの活動の中で最も重視された。³⁹⁾

IFELの概要は上記のとおりであるが、8期にわたって開催されたIFELの中で「教育社会学講習会」が開設されたのは第5期・第6期の2回であった。教育社会学は新しい教員養成のための教職課程に関わる大学教員を対象とする講習会の中の、「教職課程関係—一般的基礎—教職課程基礎学科」に教育原理・教育心理・学校財政・教育指導とともに位置づけられた。開催期間は、第5期が1950（昭和25）年9月18日

～12月8日、第6期が1951（昭和26）年1月8日～3月30日、会場は東京大学（図書館地階）、米人講師はG.C.Morehart Syracuse大学教育学教授、専任講師は海後宗臣東京大学教授、主任講師牧野巽東京大学助教授（第5期）・豊沢登東京農工大学教授（第6期）、臨時講師は13名（第5期）・20名（第6期）、受講者は21名（第5期）・22名（第6期）であった⁴⁰⁾。第6期では講義と現地調査等のほかに、L.A.Cook・E.F.Cook“*A Sociological Approach to Education*”1950とThe National Commission on Teacher Education and Professional Standards“*Improvement of Teaching, based on the Group Report of the Conference*”1947をテキストとする講読演習を実施している⁴¹⁾。

『第六回 教育指導者講習研究集録 VI（2）教育社会学』の「序文」によれば、第1回から第4回までが「教育制度に対する行政組織の整備を目的としたのに対し」第5回および第6回は「教職員の養成と再教育に対する措置」が目的とされたときされている。取りあげられた領域に関しては「…（略）…従来我国で十分な専門的研究をもたなかった科目、或は全く未開拓のまゝ、放置されてあった分野迄も包括して…（略）…」おり、ここに「教育社会学」の分科会が開催された理由があると推測される。「…（略）…講習の内容は、教育の各分野に亘って新教育の実施に欠くべからざる理論の立て方、資料の整備並びに技術の修練が中心となり、それぞれの分野における専門家の研究集会の形を取ったのである。」と説明されており、教育社会学の分科会において講読演習やフィールドワーク（現地調査）が取り入れられたのは、このような考え方によるものと理解される⁴²⁾。「Ⅷ講習日程」によれば、講習期間中の1月31日（水）の午後3時から4時半に第1回目の分担研究発表を実施、その後2月1日、5日から9日の7

日間をかけて参加者各自が1章ずつ分担して1回2章分程度を発表、最終回にあたる2月9日には「Cookの研究は各自、内容をまとめて提出することとす。」と記されており、3月14日には「CookのCritical Review提出。」と記されている⁴³⁾。その内容の要約が『研究収録』の75頁～90頁に掲載されたものと考えられる⁴⁴⁾が、その内容はL.A.Cookの記述の要約と考えられるものであって、「Critical Review」とは考えにくい。それにもかかわらず、教育社会学の研究者が当時の教育界をめぐる状況の中で、L.A.Cookの著作に真剣に取り組んだことは推測される。注41)に記されている講習参加者・講読演習担当者たちがその後日本の教育社会学の研究・教育のリーダー層となり、「日本教育社会学会」の発足に中心的な役割を果たしたことを考えると、L.A.Cookの教育社会学、コミュニティ・スクール論は日本において大きな影響を持ったと評価することができる。

(2) 現段階での評価

L.A.Cookのコミュニティ・スクール論について、日本の教育社会学界における地域社会と教育の関係についての研究の先駆者の一人である矢野峻は1981年の時点で、「教育の社会学的研究を任とする教育社会学的研究の必要性…(略)…」、「教師のための社会学的知見の必要性…(略)…」を基礎として、さらに1930年代から1940年代にかけて「地域社会学校」の実践と、それを基礎づける理論的体系的研究が行われはじめたこと、社会学的研究等の発展にしたがって、「…(略)…これまでの『教育社会学(educational sociology)』の応用社会学的性格を純粋科学としての『教育の社会学(sociology of education)』の方向に転化せしめる機縁をなした。」とこの時期における研究動向を総括して示す中で、「なかでも、教育の地域社会的研

究や実践に対して、画期的な影響を与えたものとしてクック(L.A.Cook)の業績を見落とすことはできない。かれは一九三八年はじめて教育の地域社会的アプローチを志向したテキストを公刊し、地域教育社会学の先駆者となった。」と高く評価している⁴⁵⁾。

また、新井郁男は1984年の時点で「…(略)…地域社会と学校の関係がクリティカルな問題としてクローズアップしてきたのは一九三〇年代末から一九四〇年代以降のことであった。」とその時期を明らかにした上で、コミュニティ・スクール論の研究者であるE.G.Olsenが地域社会と学校との関連について発表された当時の文献として10点をあげているうちの第3番目に、L.A.Cookの“*Community Backgrounds of Education*”をあげていることを紹介し、L.A.Cookの研究が同時代の同領域の研究者にも評価されていたことを示している。その上で、コミュニティ・スクールの考え方が取り上げられるようになった状況について、「つまり、右のような状況の進展の中で、伝統的な学校教育と青少年の基本的な生活ニーズとの間に深いみぞができてしまったことが多くの教育者の間で認識されるにいたり、そのみぞを埋めなくては、個人の自己開発も社会の福祉の増進も期待できないという危機意識が生まれたことが、地域社会と学校との関係がクリティカルな問題となった主な原因であった。この間の事情をクック(Lloyd Allen Cook)は、コミュニティ・スクール運動が始まらんとしていた一九三八年に、次のように述べている。」として、L.A.Cookの説を引用し、さらに、「クックは更にこのような新しいタイプの学校像を伝統的な学校との対比において描いている。」として、コミュニティ・スクールの特質を説明するものとして、クックの示した学校についての説明を引用している。これらの点から見ても、新井郁男はL.A.

Cookをコミュニティ・スクール論を代表する研究者・実践的提案者と評価していたといっ
て良い⁴⁶⁾。

このような地域社会と教育に関する研究者の
評価を見てもL.A.Cookのコミュニティ・スク
ール論は今日においても積極的に評価すること
ができるものと考えられるが、近年の地域社会
と学校教育の関係を密接なものとしようとする
傾向、また体験活動学習を盛んにしようという
傾向の中で再び取りあげていくことは教育実践
の上でも一定の意義を持つものと考えられる。
特に、L.A.Cookがコミュニティ・スクール論
を提唱する前提となった当時の学校教育とそれ
の置かれていた時代的・社会的背景に関する認
識や、コミュニティ・スクールの目的、内容、
方法などから、現代日本における学校教育が重
要な示唆を受けることができると考えられる。

おわりに

以上、本稿では現代日本において地域社会と
学校との関係を密接なものとしようという考え
方、体験活動学習を重視しようとする考え方が
存在するが、それらに対する示唆を得ることを
目的として、L.A.Cookのコミュニティ・スク
ール論について検討を加えてきた。その結果次
のような点が明らかになったと考える。

1. L.A.Cookは、1930年代のアメリカにおい
て社会変動が生じ、それに伴って教育問題が
発生し、そのような状況に対応する新しい教
育・学校教育のあり方が必要であるという基
礎的な時代認識・社会認識を持っていた。
 - 1-1. それ故、コミュニティ・スクール論
は実践的志向を持ち、教育の計画や実践に
寄与しうるものとして提言された。
 - 1-2. さらに教員養成課程において、地域
社会と学校教育の関係についての社会学に

基礎を置く学習が必要であることを提言し
た。

2. L.A.Cookは、コミュニティ・スクール論
を示すために本書において、第一部「アメリ
カのコミュニティ生活のタイプ」、第二部
「多くの児童を形作る幾多の影響」、第三部「コ
ンミュニティ内の教師と学校」という3領域
から考察・記述を行なっている。
3. L.A.Cookは、コミュニティ・スクールを「進
歩的な学校」と呼んでいるが、その要点につ
いて下記のように考えていた。
 - 3-1. コミュニティ・スクールの目的につ
いては、①生徒をコミュニティに同化させ、
その一員にふさわしい人間とすること、②
そのために学校と地域社会との関係を密接
なものとし、③生徒をより良いコミュニテ
ィ形成に寄与することのできる人材とする
こと、④その具体的方策として「経験」を
重視することと考えていた。
 - 3-2. コミュニティ・スクールの基礎とな
る地域社会については、基本的には「人び
との集まり」、「社会集団」であり、独自の
「文化」を持つ存在、すなわち、「人」と「土
地」と「文化」の複合体であり、人口、地
域、広義の文化を持つものにとらえていた。
 - 3-3. コミュニティ・スクールに学ぶ子ど
もについては「コミュニティの生産物」で
あるととらえ、子どもが学校外での生活経
験を持っているのであり、教師は子どもた
ちの教室外の生活や背景、子どもに影響を
及ぼしている社会力について知らなければ
ならないとしている。
 - 3-4. コミュニティ・スクールにおいては
社会変化への参加に積極的であるべきこ
と、より具体的には学校のカリキュラムに
社会研究を取り入れることが必要であり、
子どもを社会変化に親しませることは市民

の必要に応えるものであるとしている。

3-5. これを教える具体的な方法としては、形式的な知識として与えるだけではなく、「体験プラス解釈」が教授の企画や活動方式において最高のものとされるべきこと（活動プログラム）、具体的で実際行動的な「体験」がいかなる学問においても大切であること（実生活の研究）、児童の体験を広め、仕事を決める手伝、社会に入っていく用意をするものとして「ガイダンス」が重要であることを示している。

4. L.A.Cookのコミュニティ・スクール論、その基礎にある教育社会学は日本においても大きな影響を与えてきた。

第二次世界大戦後の日本においてその考え方が受け入れられたのは、当時の日本における社会変動に対応する学校教育のあり方が摸索されていた状況に対してL.A.Cookの考え方、その背景にある認識が適切であったことが一つの理由として考えられる。

5. 地域社会と学校の関係が見直される傾向にある今日の日本において、L.A.Cookのコミュニティ・スクール論は多くの示唆に富んだ研究・提言であり、そこから学んでいくことが可能であり、必要であると考えられる。

5-1. 子どもを社会的な存在ととらえる視点は今日の状況の下において、さらに重要性を増していると考ええる。

5-2. 今日の日本における地域社会の実態、子どもと地域社会の関係の実態に対してコミュニティ・スクールの考え方が見直され

るべきであり、多くの示唆を含んでいると考える。

5-3. 教員養成課程における教育内容についてもL.A.Cookの考え方に学ぶべき点は多いと考える。

筆者は現代の日本において地域社会と学校の間関係を密接なものにしようという考え方が取りあげられている傾向に関連して、そのような考え方の歴史的展開過程を考える場合には、昭和初期における郷土教育運動と、第二次世界大戦後のコミュニティ・スクール論の二つについて検討することが必要であると考え、それらについて順次考察を加えてきた。コミュニティ・スクール論に関しては先に論文「コミュニティ・スクール論の再検討—『活動・体験』学習の意義を考える—」⁴⁷⁾において、E.G.Olsenの考え方を検討した。本稿においてL.A.Cookの考え方を取り上げたことによって、第二次世界大戦後の日本において盛行を見たコミュニティ・スクール論に大きな影響を与えた二人の研究・著作については一応考察を終えたといえよう。今後の課題としては、第二次世界大戦後から今日にいたる日本における地域社会と学校の関係についての考え方、コミュニティ・スクールの考え方の展開、さらにそのような考え方に基づく教育実践について検討を加えることが必要である。これを自らの今後の課題としていきたい。

(2011年9月・稿)

[注]

- 1) 高島秀樹「地域社会の学校支援」(住田正樹編『子どもと地域社会』2010年、所収)
- 2) 文部科学省告示「小学校学習指導要領」1998(平成10)年告示、2003(平成15)年一部改正、

1~6頁

- 3) 文部科学省『総合的な学習の時間／「総合的な学習の時間」応援団のページ』文部科学省ホームページ(www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm)

- 4) 郷土教育運動に関しては、すでに下記の論文において考察を加えた。
高島秀樹「『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討」(その1)(その2)、『明星大学社会学研究紀要』第27号、2007年・第28号、2008年、所収)
- 5) 新井郁男「コミュニティ・スクール」(細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典』第3巻、1990年、所収) 297~298頁
- 6) 高島秀樹「コミュニティ・スクール論の再検討—『活動・体験』学習の意義を考える—」(『明星大学社会学研究紀要』第26号、2006年、所収)
- 7) 著者名不記載「クック」(日本教育社会学会編『教育社会学辞典』1967年、所収) 305頁
主著書名の記載に誤記があると考えられるが、ここでは原文のとおり引用・記載した。
溝口謙三「クック」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、所収) 879頁
なお、L.A.Cookが今日なお存命であればきわめて高齢になるが、死去された情報は得ることができていない。
- 8) 麻生誠「教育社会学史」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、所収) 179~180頁
- 9) L.A.Cook “*Community Backgrounds of Education A Textbook in Educational Sociology*” 1938年、McGraw-Hill Book Company, Inc.
- 10) L.A.Cook・五來要人訳『教育とコミュニティ』1950年、序(頁表記なし)
- 11) 同上 4頁
- 12) 同上 4~5頁
- 13) 同上 6~7頁
- 14) 同上 7頁
- 15) 同上 9~11頁
- 16) 同上 11頁
- 17) 同上 21~22頁
- 18) 同上 22~23頁
- 19) 同上 41~42頁
- 20) 同上 44~45頁
- 21) 同上 50~72頁
- 22) 同上 74~95頁
- 23) 同上 98~117頁
- 24) 同上 140頁
- 25) 同上 163~377頁
- 26) 同上 134頁
- 27) 同上 382頁
第三部は「コミュニティにおける教師」「誰が學校を管理するか」「進歩教育」「矯正教育」「教師とそのその訓練」の5章からなっている。
- 28) 同上 403頁
- 29) 同上 425頁
- 30) 同上 435~436頁
- 31) 同上 441頁
- 32) 同上 443頁
- 33) 同上 444~445頁
- 34) 同上 476~477頁
- 35) 同上 477~478頁
- 36) 同上 478~479頁
- 37) 同上 480頁
- 38) この著書は1960年に再び、その内容を改訂して同じタイトルで出版されている。ちなみに1960年版の内容構成を示すならば次の目次のとおりである。
“*A Sociological Approach to Education*”
Lloyd Allen Cook/Elaine Forsyth Cook
1960. McGraw-Hill Book Company, Inc.

Preface
INTRODUCTION
1. The Beginning—A Point of View
Part I. CASE STUDIES OF COMMUNITY
2. Area Study for School Personal

3. A Village That Chose Progress	岡本 六郎		
4. The Homesteaders, Value Persistence		第七章 The Great Metropolis	岡島 正平
5. Social Class in Jonesville		第八章 Unity-disunity, Change, and Planning	
6. Regional City, the Power Structure			永田 陸郎
7. The Great Metropolis, Urban Planning		第九章 School and Community Relation	
Part II. CHILD LIFE AND THE SCHOOL			小山 武
8. Acculturation of the Young		第十章 A Theory of Child Socialization	
9. Influence of the Family			松本喜一郎
10. The School and Child Acculturation		第十一章 Social Class in the School	
11. Organizing Influence of the Job			片山 豊
12. Street Gangs and Delinquency		第十二章 Toward Life-centered Schooling	
13. Mass Communication Media and Youth			堀松 武一
Part III. SCHOOL AND COMMUNITY		第十三章 Changing School Programs	
14. The Healthy Public School			藤田 勲
15. Group Dynamics in School Settings		第十四章 Group Dynamics in the School	
16. Community Action for Better Schools			宮本 七郎
CONCLUSION		第十五章 Control of Delinquent Gangs	
17. The Education of Educators			佐々 亀雄
Index		第十六章 Using Community Resources	
39) 高橋寛人「IFEL」(細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典 第1巻』1990年、所収) 3~4頁			相川 圭次
40) 高橋寛人「解説」(高橋寛人編『占領期教育指導者講習(IFEL)基本資料集成 第I巻』1999年、所収) 15/19~22頁		第十七章 School and Community Coordination	
41) “A Sociological Approach to Education”の講読演習に当たった分担者は次のとおりであった。		第十八章 The Teacher in the Community	
Preface	豊沢 登		向高 祐興
第一章 A Sociological Approach	寺本 喜一	第十九章 Campus Culture and Learning	
第二章 When Students Learn	藤原 良毅		竹之下休蔵
第三章 Nature of Community	古屋野正伍	第二十章 Development Teacher-Leader Skills	
第四章 Hamlets, Villages and Towns			三本杉国雄
	岡村 精一		
第五章 The Small City Community			
	桜井庄太郎		
第六章 The Larger Arban Community ^(ママ)			

日程については、「1. 31. (水) 午後3時から4時半まで L.A.Cook “A Sociological Approach to Education”の分担研究発表。」とあり、2月1日(木)、5日(月)、6日(火)、7日(水)、8日(木)、9日(金)、の7日を使用して毎回2~3章を分担者が発表したと記録されている。(「第6回 教育指導者講習研究集録 VI (2) 教育社会学」(橋本鉦市解説『占領期教育指導者講習研究収録』(復刻版)2001年、

所収) 288~241/481~483頁)

なお、上記報告に収録されている海後宗臣「Ⅱ. 第五回及び第六回IFEL教育社会学班の研究の回顧」では「第5回においてはアメリカの教育社会学の基本となる著作として注目されているクックの書をとってこれを輪読してはその研究結果を集めたのである。それはこの集録の中には示されていないが、一つの仕事として成果を残したものであった。これは第6回においても継続され、研究業績の一つとなっている。」(同上、3頁/169頁)と記されており、講読演習は2回にわたって実施され、その成果は第6回の報告書に集録されたとも理解されることを付言しておく。

- 42) 昭和二十五年度教育指導者講習本部 二方義 / ヴァーナー・エー・カーレー「序文」(『第六回 教育指導者講習研究集録 VI (2) 教育社会学』 上記復刻版、所収) 157頁
- 43) 「Ⅷ. 講習日程」(同上 所収) 480~483頁
- 44) 「V. Review of L.A.Cook and E.F.Cook “Sociological Approach to Education” 1950」(同上 所収、75~90頁)
- 45) 矢野峻『地域教育社会学序説』1981年、107~108頁
- 46) 新井郁男『学校教育と地域社会』(教育管理職講座⑦) 1984年、121~122頁/123~124頁
- 47) 高島秀樹、注6) と同

[参考文献]

- L.A.Cook “Community Backgrounds of Education A Textbook in Educational Sociology” 1938. McGraw-Hill Book Co., Inc.
- L.A.Cook・五來要人訳『教育とコミュニティ』1950年、リスナー社
- L.A.Cook / E.F.Cook “A Sociological Approach to Education” 1950. McGraw-Hill Book Co., Inc.
- E.G.Olsen and Others “School and Community” 1945. Prentice-Hall Inc.
- E.G.Olsen・宗像誠也・渡辺誠・片山清一訳『学校と地域社会』1950年、小学館
- 橋本鉾市解説『占領期教育指導者講習研究収録 昭和25年度 教育社会学』(復刻版) 2001年、すずさわ書店
- 矢野峻『地域教育社会学序説』1981年、東洋館出版社
- 新井郁男『学校教育と地域社会』(教育管理職講座⑦) 1984年、ぎょうせい
- 高島秀樹「『我國に於ける郷土教育と其施設』調査の検討」(その1)(その2) (『明星大学社会学研究紀要』第27号、2007年・第28号、2008年、所収)
- 高島秀樹「コミュニティ・スクール論の再検討—『活動・体験』学習の意義を考える—」(『明星大学社会学研究紀要』第26号、2006年、所収)

(たかしま ひでき、本学人間社会学科教授)